

# 歴史調査にもとづく地域資源の活用可能性 —福岡市中央区清川ロータリーを事例として—

石橋 知也<sup>1</sup>・小西 圭介<sup>2</sup>・柴田 久<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 福岡大学助教 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1)  
E-mail:tomoya@fukuoka-u.ac.jp

<sup>2</sup>非会員 日本海洋コンサルタント株式会社 技術本部 (〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目7-9)  
E-mail:konishi@ocjpn.co.jp

<sup>3</sup>正会員 福岡大学教授 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1)  
E-mail:hisashi@fukuoka-u.ac.jp

本稿ではどこにでも存在する可能性のある地域資源の保全検討をめぐり、その地域資源に対する歴史調査が保全や利活用に寄与する可能性について考察することを目的とする。福岡市中央区清川におけるロータリー交差点改修整備事業を事例に、事業経緯と検討過程および整備状況について報告する。ロータリー交差点を存続させるか否かを決定する協議を第1回に設定し、ロータリーの歴史調査等を十分におこなったことが事業推進に寄与したといえる。具体的には、清川地区のまちの形成過程とロータリーの発生を関連づけて説明したことで、地域資源としての意味を地区住民や行政の方々と共有できたことが重要であった。本事例を通じて、地域の抱える資源の歴史的価値や状況を客観的に説明できる第三者の立場からの説明は重要な意味をもつことが改めて確認された。

**Key Words :** regional resource, historical study, roundabout, Fukuoka city

## 1. はじめに

今日、公共空間整備をめぐっては利便性や機能性を重視するあまり、歴史性を有する地域固有の資源が消失してしまうことも少なくない。公共事業の性格上、一度失われた資源を再生することは極めて困難であり、整備が行われる前に地域資源をいかに保全あるいは利活用するか検討しておく必要がある。歴史的な価値が既に評価され、地域資源が豊富に存在するような地区では、法制度等を用いて面的に保全がなされ、観光等に活用されているものの、いわゆる一般市街地においては、地域資源の保全に関する議論さえも起こることなく整備が進められる場合も多い。

本稿では上記の問題意識から、どこにでも存在する可能性のある地域資源の保全検討をめぐり、その地域資源に対する歴史調査が保全や利活用に寄与する可能性について考察することを目的とする。そこで今回は、福岡市中央区の清川172号線において行われたロータリー交差点改修整備事業を対象にとりあげ、事業経緯ならびに検討過程に加え実際の整備状況について報告するものである。

## 2. ロータリー交差点改修整備事業の概要

### (1) 事業実施の経緯

福岡市は、市内の道路整備の指針として2009年に「福岡市道路整備アクションプラン2011」を策定しており、その基本方針の一つとして『すみよいまち「ふくおか」をささえる道づくり』を掲げ、「通学路に指定されている道」等を優先的に整備している<sup>1)</sup>。これをうけ、以前より「歩道の勾配や段差」「街路樹の根上がり」「大雨時の水害」等の問題が指摘されていた清川172号線において、安全かつ快適な歩行空間への改善を目指し、2011年度から3年計画で整備がおこなわれることとなった(写真-1)(写真-2)(図-1)。清川172号線は全長860mの片側1車線道路で、ロータリー交差点を有しており道路整備に連動した何らかの改修が見込まれていた。

### (2) 事業の体制と方針

事業は、福岡市中央区地域整備課と建設コンサルタントによって推進され、筆者らの所属する福岡大学景観まちづくり研究室が協力する体制をとっている。福岡市は、道路整備に際して、ロータリー交差点を存続させるか否かを決定する必要があったため、清川172号線の沿道



写真-1 172号線から  
みた清川ロータリー



写真-2 歩道の段差



図-1 清川172号線と周辺  
道路の位置関係

住民の方々に参加を促すかたちで複数回のワークショップ（以下、WS）を開催する方針とした。

事業の工程は、2010年度に4回のWSならびに基本設計をおこない、2011年度に道路・交通の両管理者間の協議をすすめる、その後3区間にわけて着工されている。なお、ロータリー交差点区間は2014年5月に竣工した。

### 3. ロータリー交差点に関する歴史調査

本章では、清川ロータリー及び周辺区域の歴史について資料およびヒアリング調査をもとにまとめる。

#### (1) 清川地区の歴史の変遷

##### a) 清川開拓の経緯（～明治43年）

福岡城下町には、江戸時代から約300年続く遊郭がかつて柳町（福岡市下呉服町）に存在した<sup>2)</sup>。しかし、1903（明治36）年に京都帝国大学福岡医科大学（現、九州大学医学部）が福岡市への招致が決定したことにより、1910（明治43）年に現在の福岡市中央区清川に移転することとなった<sup>3)</sup>。その理由として、大学と遊郭がある柳町は、直線で1km程度の距離であり（図-2）<sup>4)</sup>、遊郭の存在が学生の風紀を乱すと考えられたことが挙げられる。遊郭移転に伴い、福岡県知事は、福岡の地主である渡邊与八郎に、郊外に位置する現在の清川の土地4万坪を買い占めさせた。その後、田畑であったその土地を宅地に造成し、町名を新柳町と名付けた。移転前の新柳町周辺の地価は1坪20銭程度であったが、移転が発表されると5円～10円に高騰した。当初福岡県は1910（明治43）年までの移転を計画していたが、地価の高騰により楼主の移転にかかる費用の負担が大きくなった。その結果、上記日程までに移転した妓楼は42件中12件であり、福岡県は移転の期日を1911（明治44）年まで延期している。

##### b) 新柳町遊郭の概況（明治44年～昭和33年）

新柳町の開拓については前述した通りであるが、移転直後の新柳町は、郊外に位置し周辺に人家はなく、交通の便も悪いことから、訪れる人は少なかった<sup>5)</sup>。しかし、1911（明治44）年10月には博多電気軌道の開通をきっかけに、新柳町遊郭で賑いが把握されるようになった。大正時代初期には、遊郭の入口として石門が整備され、大門通り（現在の清川172号線）と名付けられた（写真-3）。また通りには桜並木が植樹され、通りの沿線には楼主やその家族、娼妓など新柳町遊郭で従事する労働者の食事を賄うための共同炊事場があった（写真-4）。このように新柳町は遊郭としての町の体制を整えた結果<sup>6)</sup>、九州を代表する遊郭となった<sup>7)</sup>。また当時の福岡市実測図<sup>8)</sup>からは新柳町の街区形状が把握でき、現在のロータリーのある位置に隅切りされた交差点が看取された（図-3）。さらに1932（昭和7）年と1938（昭和13）年の間に大門通りが南東に延伸されていることが確認された。上記のように繁栄の一途を辿っていた新柳町であるが、満州事変の頃（昭和6年）を境に遊郭の経営に見切りをつける遊郭経営者が増えるようになり、経営者が目まぐるしく変わることとなる。さらに第二次世界大戦時には、通りに空き家が並ぶようになり、訪れる人が減少したこと、空襲により建物が焼失したこと等から休業する妓楼も多く、終戦まで営業を続けた妓楼はわずか9軒だけであった。

また戦後には、連合軍司令部は公娼の廃止を目指し「日本政府に対する覚書」を送った。これに対し、日本政府は特殊飲食店法を制定し、公娼を廃止し私娼を黙認した。この法律では、女性は自由意志で特殊飲食店に下宿または寄寓し、女給や酌婦等、その店の業務に応じて自活できる職をもつことが認められていた。したがって、店主は客から飲食代のみを請求し、売春を前提として料金を受け取することを認めないように方針を定めた。しかし、公娼の廃止は連合軍の命令で制定された法律であり、日本の警察は摘発に積極的ではなかったため、上記の条件も守られてはいなかった。その後、1956（昭和31）年に売春防止法が可決され、1958（昭和33）年に施行された。これらの法律の改正を受け、新柳町でも遊郭の営業が禁止となった。

##### c) 新柳町から清川へ

新柳町時代の変遷については既に述べた。一方、遊郭禁止後は、新柳町は1962（昭和37）年に町名が清川へと改められた。町名の由来については諸説あるが、「過去を絶つ意味」と「那珂川の清流」に因んでいると言われている。また旧遊郭経営者達の多くは、旅館や飲食店、雀荘等に転職した。さらに「南都振興会」を立ち上げ、共同炊事場の跡地にキャバレー月世界を建てた（図-4）。昭和40年代～50年代には、月世界を中心に、バー・スナック・キャバレー・遊技場などを建設し歓楽街として賑

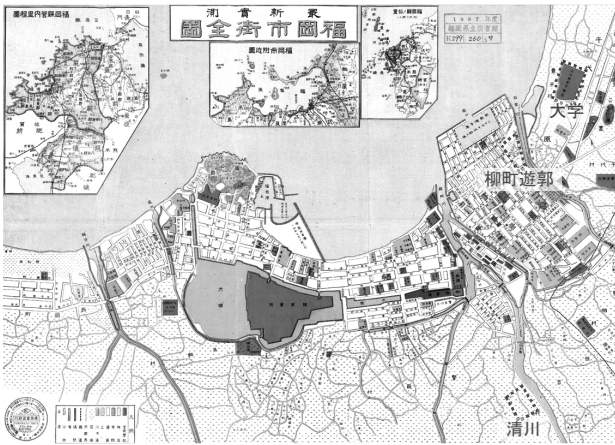


図-2 大学と柳町遊郭および清川の位置関係



図-3 開拓当時の清川と街路形態



写真-3 遊郭入口の石門と大門通り（大正初期）



写真-4 共同炊事場

っていた。しかし、昭和50年後半になると衰退することとなる。また昭和60年以降は、企業の本社ビルが清川周辺に移転し、清川にはマンション等が建設されるようになった。



図-4 清川の主要施設の位置と街区形状の変遷

## (2) ロータリーと172号線での活動と変遷

ここではヒアリング調査をもとにロータリーおよび172号線周辺での活動を把握する(表-1)。住民へのヒアリング調査から、ロータリーの位置にかつて井戸が存在していたことが把握された。その井戸は「近所の人と洗濯をした」など地域のコミュニケーションの場であったことが確認された。また大門通り(清川172号線)では、どんたく舞台や屋台の設置、飾り山の展示等の空間活用が把握された。今日の清川に関することとして「町の雰囲気が変わって、昔を感じられる場所がない」等の意見を抽出した。

## (3) 日本の遊郭街との空間構造の比較

ここでは、明治以降にできた遊郭について既往の研究論文<sup>9)</sup>をもとに空間構成を把握する。

まず我が国における遊郭発祥については、諸説あり定かではない。しかし、1589(天正17)年、京都冷泉万里小路が豊臣秀吉の許可を得て公許の遊郭が出現した後、江戸期に全国的に広がった説が有力である。江戸期の

表-1 ローターリーと172号線の変遷および活動

ヒアリング対象者	住所	年齢(在任歴)	ヒアリング日時	ヒアリング調査結果 Q1:ロータリーができた時期について Q2:ロータリー及び172号線の変遷について Q3:清川の町の変遷と住民の活動の変化について
A(男性)	清川1丁目	57歳(57年)	2010/10/26 11:00~	新柳町に関すること(昭和33年) 幼い時からロータリーはあった/通りには遊郭の街並みが色濃く存在した/昔は飾り山があった 清川に関すること(昭和34年) どんたくレードが通っていた/信号機が出来て渋滞するようになった/薬局や美容院が多い/マンションが多くなった/夜間の交通事故が多い/タクシーの駐車が
B(女性)	清川2丁目	63歳(63年)	2010/11/1 13:00~	新柳町に関すること(昭和33年) 60年くらい前にはロータリーがあった/ロータリーにどんたく舞台設置されていた 清川に関すること(昭和34年) 歓楽街であった/昭和40年代まで、清川は活気があったが、50年代から活気がなくなった/交通事故が多い/ロータリーに愛着があり残したいものが、交通事故が減らないならロータリーをなくしてほしい
C(男性)	清川3丁目	41歳(27年)	2010/11/1 19:00~	清川に関すること(昭和34年) 住民がロータリーの草抜きを行っていた/ロータリーの地盤が低く、昭和40年代に浸水した/子供の頃は歓楽街であった/修学旅行生が訪れていた/清川にあまり良いイメージはない/清川172号線の大規模な整備はない/月世界が清川に活気を与えていた/20年前にロータリー中心部にあったネオンの看板が撤去された/日赤通りの抜け道として使われるようになった/現在の清川の特徴がない
D(男性)	清川3丁目	48歳(30年)		
E(男性)	清川3丁目	60歳(60年)	2010/11/2 10:00~	新柳町に関すること(昭和33年) 通り洋館など遊郭の街並みが存在した/ロータリーの前は井戸があったと聞いている/昔は飾り山があった
F(女性)	清川2丁目	92歳(65年以上)	2010/11/4 14:00~	新柳町に関すること(昭和33年) ロータリーの前にポンプ式の井戸があった/住民は井戸で洗濯等をした/井戸はコミュニケーションの場であった
G(男性)	清川3丁目	57歳(57年)	2010/11/4 14:30~	新柳町に関すること(昭和33年) ロータリーができる前は、井戸があったと聞いたことがある/山笠の自治があった/どんたく舞台があった/清川1丁目は娯楽街であった
H(男性)	清川2丁目	85歳(85年)		清川に関すること(昭和34年) 花街から旅館街を目指したロータリーがあり大型バスが通れなかった/修学旅行生が清川の旅館に宿泊しなくなって、町に活気がなくなった/ロータリーの前に舞台があった/清川に月世界等の大きなキャパがあり、活気があった/町の雰囲気が変わって、昔を感じられる場所がない/何度となく、ロータリー撤去の話があった
I(女性)	清川3丁目	59歳(37年)		
J(女性)	清川2丁目	74歳(53年)		

遊郭の立地として港町や宿場町などの人の往来が多い場所であることが把握された。また明治期には、風紀上の問題から都市中心部の人の往来が多い場所や人家密集地にある遊郭は都市の郊外に追いやられていることが明らかとなった。その立地構造は背後に海や鉄道線路、河川があり、遊郭が拡散しないようにされている。一方、主要道路から一筋入った場所に立地するものなど風紀上の問題を考慮しているものについては、移転がなされなかった。また江戸期・明治期における遊郭の空間構成を把握できる地図からは、新柳町遊郭のような隅切りされた交差点は把握されなかった。このことから、新柳町の空間構成において井戸が影響を与えていると推察できよう。

#### (4) 小結

##### a) 現在まで継承される街区形状

江戸時代から約300年続く遊郭が柳町（福岡市下呉服町）にかつて存在した。しかし、1903（明治36）年に京都帝国大学福岡医科大学の招致が決定したことにより、1910（明治43）年に現在の福岡市中央区清川に移転することとなった。遊郭移転に伴い、郊外の田畑が開拓され新柳町と名付けられた。

当時の福岡市実測図からは新柳町の街区形状が把握でき、ロータリーのある位置に隅切りされた交差点が看取された。さらに、大正・昭和・平成に作成された地図<sup>10)</sup>を比較した結果、街区形状は現在に至るまで変化していないことが把握された（図-4）。

##### b) メインストリートとしての清川172号線

現在の清川172号線は、かつて大門通りと呼ばれてお

り、この名は遊郭の入口に石門が整備されたことに由来する。大正時代には桜が街路樹として植樹され、通り沿いには新柳町遊郭に従事する労働者の食事を賄う共同炊事場があった。さらにヒアリング調査から、大門通りは「どんたく舞台や屋台」「飾り山展示」等で賑っていたことが把握された。しかし、1946（昭和21）年および1958（昭和33）年の2度にわたり遊郭の営業を取締る法律が改正され、新柳町でも営業が禁止となった。

遊郭廃止（1958年）後には、旧遊郭経営者達は「南都振興会」を立ち上げ、上記共同炊事場の跡地にキャバレー「月世界」を建設した<sup>11)</sup>。昭和40～50年代には、清川は月世界を核とする歓楽街となった。このように清川172号線の沿線には、時代を反映した施設が立ち並び、人々の活動景が存在していた。以上より、この通りは清川地区のメインストリートとして位置づけられるといえよう。

##### c) コミュニティ形成の場としてのロータリー

ヒアリングから、現在のロータリーの位置にかつて井戸が存在していたことを確認した。ここでは「近所の人と洗濯をした」などの活動が把握された。また井戸が埋め立てられた後も、住民によるロータリー内の草抜き活動等の存在を確認した。これより、ロータリーのある空間が日常生活に密着したもので、コミュニティ形成の場として機能していたものと推察される。

## 4. 清川ロータリーワークショップの経緯

清川ロータリーWSは、2010年12月から2011年3月にかけて計4回開催され、沿道住民の参加のもとロータリー交差点の整備方針について検討がおこなわれた。WSの企画・運営は福岡市・建設コンサルタント・大学の三者協働でおこない、交通管理者の立場として福岡県警察中央警察署の担当官にもWSに同席していただいた。また毎回のWSの内容をニュースとしてまとめ、地区住民の方に配布して参加の呼びかけと情報共有を図った。

### (1) 第1回ワークショップ

第1回WSは2010年12月20日に開催され、テーマは「清川ロータリーを知ろう」であった。ここでは、事業主である福岡市が清川172号線の道路整備事業の内容を説明し、大学はロータリー交差点の歴史調査の結果ならびに交差点交通調査の結果を報告した。加えてロータリー交差点を日常的にみている住民からの意見を集約していった。その結果、ロータリー付近での交通事故など安全面での不安があるものの、ロータリーが地域を代表する存在であり歴史性も有していることをふまえ、「ロータリーを存続させた交差点」として整備することが合意され

た。

## (2) 第2回ワークショップ

第2回WSは2011年1月17日に開催され、テーマは「改修計画の内容を検討しよう」であった。ここでは、ロータリー交差点の問題点を共有し解決策を話し合い、改修の方向性を検討した。その結果、自動車に対してロータリーの通り方を明示すること、自転車通行に対する配慮をおこなうこと、歩行者優先の整備をおこなうこと等の意見を得ることができた。

## (3) 第3回ワークショップ

第3回WSは2011年2月23日に開催され、テーマは「改修計画の詳細を検討しよう」であった。ここでは、第2回WSでの意見をふまえたロータリー交差点改修デザイン案を3つ提示し、それぞれに対して賛同できるところと気になるところについて意見を集約していった。その結果、3案中の1案に絞るのではなく、各案のもつ良い点を重ね合わせることで最終デザイン案を導出する方向性が合意された。

## (4) 第4回ワークショップ

第4回WSは2011年3月23日に開催され、テーマは「改修計画を確認しよう」であった。第1回から第3回までのWSで検討した内容を基に作成されたイメージ図を用いて、改修計画の確認がなされ最終デザイン案で整備されることが決定した。また今後の工事工程の共有もなされている。

## 5. ロータリー交差点改修整備の詳細

まず、整備前から指摘されていたロータリー交差点の課題について整理する(写真-5)。第一に、ロータリーへの接触回避である。沿道住民からもこれまでの交通事故について多くの意見が挙がった。第二に、ロータリーに面する歩道付近への駐車車両の排除であり、ロータリー空間内での円滑な車両通行を駐車車両によって妨げることは避けなければならない。第三に、交差点に進入する車両の速度を減速させることである。そして第四に、ロータリーを通行する歩行者や自転車の移動距離をできるだけ短縮することであった。

次に、これらの課題を解決することを念頭に改修整備されたロータリー交差点の要点を以下に示す。

### (1) ロータリーの視認性と存在感の向上

ロータリーの形状については、従来のものよりも高く



写真-5 改修整備前のロータリー



写真-6 改修整備後のロータリー

かつ直径を大きくつくることによって、視認性を向上させている(写真-6)。また、ロータリー立ち上がり部から外側に約70cmのピンコロ石舗装を設け、道路舗装とロータリーとの間の緩衝帯として機能するようにした(図-5)(図-6)。これはロータリー交差点の設計上の重要な工夫点であり、車道の舗装とは色や材質を変えることで、通過車両を減速させる効果があるとされる。夜間の対策としては、反射板を設けることにより高い視認性を確保することとした。なお、反射板設置について、ロータリーの造形にできるだけ影響を与えないよう、細長い棒状のものを採用し必要最小限の本数に留めている。

### (2) ロータリー交差点周辺の歩道部の拡幅

従来の歩道部をロータリー中心方向に向けて拡幅し、歩道に沿うように駐車する車両が発生しないようにした(図-7)。加えて、歩道部に縁石を立ち上げると同時にポール形式の車止めを配すことによって駐車車両の歩道への乗り上げも防いでいる(写真-7)。縁石と車止めの両方を用いたのは沿道建物への車両の衝突を防ぐ意図も含まれている。このことも沿道住民の過去の経験から挙げられた意見を踏まえた対策のひとつである。

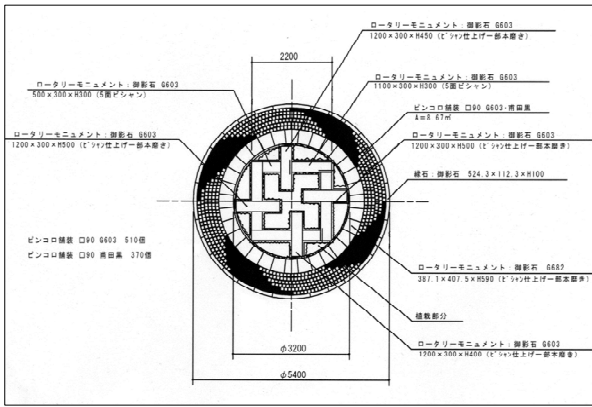


図-5 ロータリー平面図 (福岡市提供の資料より)

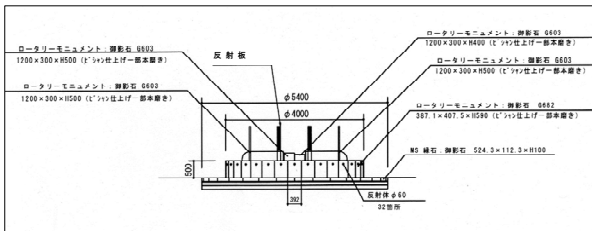


図-6 ロータリー正面図 (福岡市提供の資料より)

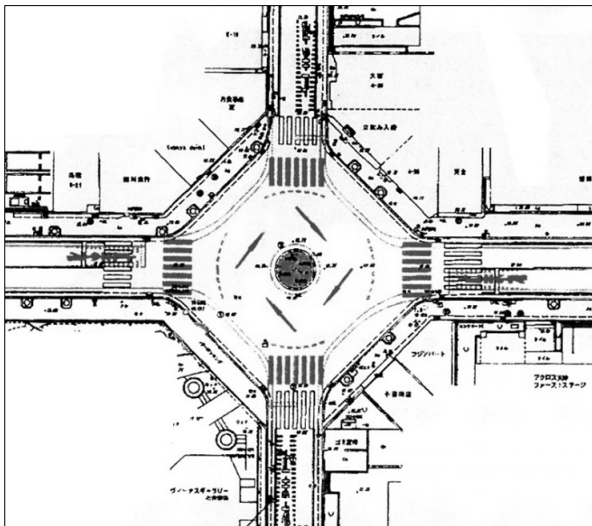


図-7 整備前後での路面標示の変更  
(整備後を赤い線で表現している) (WS資料より)

### (3) ロータリー改修に連動させた路面標示の変更

ロータリーに浸入する車両速度を逡減させるために、交通量の比較的多い南北方向の交差点入口部に減速標示を施している(写真-8)。一方で、歩行者や自転車の交差点での移動距離が短くなるように、横断歩道の標示位置を従来よりもロータリー中心側に4箇所全て移動させている(図-7)。

### (4) 歴史を継承し地域のシンボルとなる造形

ロータリー中心部には石材をくみ上げたモニュメントを設置している(写真-9)。この造形は、WSにて話題となった交差点の歴史に由来している。大正時代に本地区が開拓されたとき以来、隅切りされた交差点の存在が



写真-7 歩行道境界には縁石と車止めを設置



写真-8 交差点入口部に施した減速標示



写真-9 上方からの交差点全景

当時の測量地図からも確認でき、この交差点にはかつて井戸が存在していたなど生活に密着した交流の場であったことが把握された、という歴史調査結果にもとづいている。

## 6. まとめ

以上、本事業の経緯からWSの過程、さらに出来上がったロータリーの詳細について述べてきた。WSのすす

め方については従来の手法に比べて特段に変わったことをしたわけではないが、特筆すべき点としては、交通管理者である警察の担当官に同席いただけたことであろう。これによって、交差点改良に関する「できる／できない」の判断がWS中に可能となり、WSにおける議論の焦点が「単なる理想を語ること」から「実現可能な方向性の模索」へと絞られたことは本WSプロセスの成果であるといえる。事前に福岡市が福岡県警察と連携をとり、WSへの参加を促していたことは評価されるべきであろう。

一方、本WSでの合意形成に着目すると、ロータリー交差点を存続させるか否かを決定する重要な場面を第1回に設定し、ロータリーの歴史・交通調査等といった準備を十分におこなったことが事業そのものの推進に寄与したといえる。特に、地域資源（清川にとってのロータリー）を保存活用する際に歴史的な価値付けが大きく影響を与えた。具体的には、清川地区のまちの形成過程とロータリーの発生を関連づけて説明したことによって、地域資源としての意味を地区住民や行政の方々と共有できたことが重要であった。つまり、地域資源を個別に保存しようとする場合においても、その資源のおかれている広い意味での地区環境の歴史的な理解から議論を始めるべきであり、地区の歴史的な文脈のなかに個別の地域資源をどのように位置付けるかが重要な視点となる。今回の事例を通じて、地域の抱えている資源の歴史的価値や状況を客観的に説明できる第三者の立場（今回はたまたま大学研究室が担った）からの調査や説明は重要な意

味をもつことが改めて確認されたと考える。また、本事業が近年話題となっている「ラウンドアバウト」のひとつの参考事例として取り上げられることを願う次第である。

**謝辞：**本稿をまとめるにあたり、福岡市中央区地域整備課ならびに株式会社アーバンデザインコンサルタントの担当各位に取材協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。

#### 参考文献

- 1) 福岡市：福岡市道路整備アクションプラン 2011, p.12, 2009
- 2) 井上精三：博多風俗史遊里編, p9, 1968
- 3) 前掲2), p.181
- 4) 福岡市実測図, 1908
- 5) 前掲2), p.193
- 6) 前掲2), p.199
- 7) 松川二郎：全国花街めぐり, p.589, 1929
- 8) 福岡市実測図, 大正初期
- 9) 北地祐幸：近世・近代都市における遊里・遊郭の立地構造に関する研究, 東京工業大学博士論文, 2005
- 10) 例えば、福岡市縦断詳細地図（1936）, 福岡都市計画図（1969, 1983）
- 11) 渡邊弘子：博多新柳町の跡, p.12, 2007

(2015.4.6受付)